

目次

凡例……………x

第I部 条件表現

第一章 条件表現史にみる文法化の過程……………3

一 はじめに……………3

二 順接条件の場合……………3

三 逆接条件の場合……………8

四 接続助詞から接続詞へ……………14

五 おわりに……………16

第二章 完了性仮定と非完了性仮定の分類について

—— 補説・大蔵虎明本の「タラバ」——……………19

一 はじめに……………19

二	条件表現の分類について	20
三	完了性仮定と非完了性仮定について	22
四	おわりに	30

第三章 順接の接続助詞「ト」再考

—— 狂言台本にみる近代語条件表現の流れ ——

一	はじめに	33
二	近世前期断本の状況	34
三	狂言台本における「ト」の様相	35
四	同時・即時的表現から条件表現の形式へ	41
五	おわりに	47

第四章 確定条件の表現形式の地理的分布と史的変遷

一	はじめに	51
二	「から」と「ので」に対応する表現形式	52
三	史的変遷とのかかわり	53
三・一	「サカイ」系の語の歴史と分布	54
三・二	「カラ」の発達	57
三・三	「ケー」「ケン」の分布と語源	57

三・四 「デ」「ノデ」の発達……………	58
四 「けれども」と「のに」に対応する表現形式……………	59
五 おわりに……………	62
第五章 仮定条件の表現形式の地理的分布と史的変遷……………	65
一 はじめに……………	65
二 『方言文法全国地図』第三集の項目……………	65
三 完了性仮定・非完了性仮定の表現形式……………	67
四 形容詞の仮定形……………	72
五 おわりに……………	74
第六章 『浮世風呂』におけるト・バ・タラ……………	75
一 はじめに……………	75
二 近世後期江戸語における「ト」とその周辺……………	75
三 『浮世風呂』におけるト・バ・タラ……………	78
三・一 偶然確定条件（a用語）の場合……………	79
三・二 仮定条件（b用法）の場合……………	82
三・三 恒常条件（c用語）の場合……………	85
四 おわりに……………	87

第七章 森鷗外『舞姫』における条件表現

—— 近代文語文の読解と文法指導 ——

一 はじめに	91
二 「已然形＋バ」の用法	92
三 「未然形＋バ」の用法	94
四 おわりに	97

第Ⅱ部 否定表現

第八章 否定表現の変遷

—— 「あらず」から「なし」への交替現象について ——	101
一 はじめに	101
二 「あり」「なし」の機能と分類	102
三 上代・中古における「あらず」「なし」の用法	104
四 中古和文資料における補助用言「なし」の検討	106
五 中世の変遷過程	112
五・一 説話集・軍記物語・歌論書等において	113

五・二	抄物・キリシタン文献・狂言台本において	121
六	おわりに	128
第九章 「ゴザナイ」と「ゴザラス」、「オリナイ」と「オリヤラス」「オヂヤラス」		
——その消長と待遇法——		
一	従来の研究と問題点	133
二	「御座アル」「御座ナイ」の成立と発達	135
三	「ゴザナイ」から「ゴザラス」へ	141
四	「オリヤル」「オヂヤル」の否定形式について	147
第十章 院政・鎌倉時代におけるジ・マジ・ベカラズ		
一	はじめに	155
二	「ジ」「マジ」「ベカラズ」の分布	156
三	活用形をめぐって	160
四	表現内容をめぐって	164
五	「ジ」の固定化について	171
六	おわりに	175

第十一章 院政・鎌倉時代における否定推量・否定意志の表現

—— ジ・マジ・ベカラスの周辺 ——

一	はじめに	181
二	ジ・マジ・ベカラス(補遺)	184
三	ザラム・ナカラム	186
四	ザルベシ・ナカルベシ	193
五	ベク…アラズ・ベク…ナシ	198
六	ベキ(事)ニ…アラズ(…ナラズ)	201
七	ベシト…ズ、その他	204
八	おわりに	209

第十二章 「ベシトモ覚エズ」考

一	はじめに	215
二	中古における「ベシトモ覚エズ」型表現	216
三	「ムト…思ハズ」などの表現	219
四	鎌倉時代における「ベシトモ覚エズ」型表現	222
五	おわりに	229

第十三章 室町時代における否定推量・否定意志の表現…………… 233

一 はじめに…………… 233

二 各表現形式の使用状況の概観…………… 234

三 謡曲・幸若舞曲の場合…………… 236

三・一 ジとマジ…………… 236

三・二 マジの活用形と諸用法…………… 238

三・三 ベカラズ、ベシト……………ズなど…………… 241

四 キリシタン文献・狂言台本の場合…………… 243

四・一 ジの衰退…………… 243

四・二 マジイとマイ…………… 244

四・三 その他の表現形式…………… 246

五 おわりに…………… 248

第Ⅲ部 反語表現

第十四章 反語表現における文語性と口語性

——元和卯月本謡曲と大藏虎明本狂言とを比較して——…………… 253

一 はじめに…………… 253

二	肯定的事態の反語表現	255
二・一	〔A〕疑問詞〔+カ(ハ)〕……ベキ、……ベキカ、など	255
二・二	〔B〕疑問詞〔+カ(ハ)〕……ム、……メヤ、など	257
二・三	〔C〕疑問詞……ウ、疑問詞……ウゾ、……ウカ、など	259
二・四	〔D〕〔省略・吸収〕表現、……モノカ、……カ、など	261
三	否定的事態の反語表現	263
三・一	〔E〕疑問詞〔+カ)〕……ナカルベキ、	
	疑問詞〔+カ(ハ)〕……ザルベキ、など	264
三・二	〔F〕疑問詞〔+カ(ハ)〕……ザラム、	
	疑問詞+カ……ナカラム、など	265
三・三	〔G〕疑問詞……マイゾ、……マイカ	266
三・四	〔H〕疑問詞+カ(ハ)……ザル、疑問詞〔+カ(ハ)〕……ヌ、	
	……ナキカ、……ズヤ、……ヌカ、など	266
四	おわりに	268
	引用・参照文献	273
	小林賢次自筆書き入れより(編者の解説を含む)	279
	所収論文の掲載書籍・雑誌一覧(第二卷)	280
	本書所収の論文解説と未来への展望	283
	田和真紀子	

凡 例

- 1 研究書として刊行されたもの（「初版本」と称する）を根幹に、既発表論文を研究テーマごとに巻を分けて構成している。
- 2 初版本の論文体裁を尊重しており、編者の統一は、【注】表示のあり方など、ごくわずかである。
- 3 編者の統一を控えた理由は、三〇〜四〇年にわたる研究論文執筆において、論題や扱う資料によってその文体や表示面に変容が生じるのは自然の流れであると考えられるからである。また、機械的な統一によって、その論文本来のもつ「調和」をそこないたくなかったからでもある（ただし、数字の表記方法など最低限の統一については、読みやすさを考慮し、編集部のほうで手を加えた箇所がある）。
- 4 小林賢次は縦書き派であったので、横書き（横組み）で出版された一部の論考については、縦書きに直している。
- 5 引用・参照文献の挙げ方にも、古いものと新しいものとは変容が生じているが、初出、あるいは、初版本のままを反映している（ただし、編集部のほうで可能な限り形式の整理をおこなった）。
- 6 初版本に小林賢次自筆の書き入れがあるものについては、「小林賢次自筆書き入れより」という一項目を設けて、参考に供する。
- 7 初版本に誤植等、すでに小林賢次によって朱が入っているものは、6の扱いをせず、訂正された形を本文上に反映させている。

第I部
条件表現

第一章 条件表現史にみる文法化の過程

一 はじめに

本章における筆者の目標は、文法化 (grammaticalization) という概念で、これまでの日本語史研究における多くの知見を改めてとらえ直すことにある。そこで、ここでは特に新しい事実の指摘をするというよりも、条件表現に関するこれまでの研究の成果を整理し、筆者自身を取り組んできたさまざまな問題を、「文法化」の一現象としてとらえていくことを心掛けたと思う。

文法化の概念そのものも、必ずしも明確に定まったものではなく、どのような内容を含むのかは立場によって異なる面もあるようであり、今後の研究の進展によっても変わってくるものとみられるが、とすれば、日本語の歴史におけるさまざまな現象とその位置づけは、文法化の理論の構築にも大いに貢献することが期待される。ここでは、大堀壽夫(二〇〇四)において、「語彙的要素(動詞、名詞など)が意味的に抽象化し、文法的要素になったもの」とされる典型的な事象を中心としつつも、格助詞から接続助詞へといった機能の「多機能化」(典型例に対する周辺例)をも含める立場によって考えていきたい。語彙的要素から文法的要素へ、という脱範疇化の流れだけでは、さまざまな史的展開の様相を十分にとらえられず、文法化にもさまざまな段階が存在すると思うからである。

二 順接条件の場合

まず、順接の仮定条件から取り上げる。仮定条件の推移は、古代語の「未然形+バ」の形式による表現から、近代語の「仮定形+バ」への移行という形で、表現形式の交替が問題とされてきたが、当然その他の表現形式の推移が、さまざまな形でかかわってくる。

古代語の「花咲かば見む。」という表現に対応するのは、近代語においては、「花が咲いたら見よう。」ということになる。「タラ」は、本来は完了の助動詞「タリ」の未然形であるが、近代語においては、「タリ」のその他の活用形は衰退しており、学校文法などでは、「タラ」は過去の助動詞「タ」の仮定形として位置づけられるものの、接続助詞「バ」を伴うことも稀になり、すでに接続助詞に近い存在になっている。⁽¹⁾ただし、

○花が咲いたら、見に行こう。

という仮定条件において、「タラ」は、〈咲いたそのときに〉という事態の成立・完了を担うものとなっており、さらに、偶然確定条件の場合、

○花を見に行ったら、もう散ってしまっていた。

のように、〈見に行くという行為をしたそのときには〉という「タ」による過去・完了の表現内容がそのまま保たれていることは注意が必要であろう。

また、「もし花咲かばこの種買はむ。」のような例にあつては、「花が咲く(の)ならこの種を買おう。」となり、〈花がたしかに咲くのかどうか〉という事態の判断を問うことになり、「ナラ」による非完了性の表現がとられるところである。

完了の助動詞「タリ」は「…テアリ」、断定の助動詞「ナリ」は「…ニアリ」がその出自として想定されるので、「未然形+バ」の形式に対して、新たに発達を上げた「ナラ」「タラ」は、存在動詞から助動詞化したものが、さらに接続助詞的性格のものへと転じてきたことになる。

「ナラ(バ)」の場合、中世からの発達段階において、「モノ」に接した「モノナラバ」の形式が多用されていたことが知られている。

①「此事しおほせつるものならば、国をも庄をも所望によるべし。」(寛一本平家物語・卷一・俊寛沙汰125〔日本古典文学大系〕)

②「もし此事もれぬるものならば、行綱まづ失はれなんす。他人の口よりもれぬ先にかへり忠して、命いかう」と思ふ心ぞつきにける。(同・卷二・西光被斬151)

準体法を受ける「ナラバ」の発達をささえる形で、形式名詞「モノ」が使用されていたものとみられる。例示した①②は、それぞれ「ツル」「ヌル」という完了の助動詞に「モノナラバ」が接したものであり、完了性の仮定条件になっている。「モノ」という形式名詞は、さらに進んで、仮定条件の強調形式とでもいべきものへと転用されているのである。用例はそれほど多くはないが、「コト」や「ホド」を上接した「コトナラバ」「ホドナラバ」という表現形式も見られ、それぞれ独自の意味を分担している(『小林賢次著作集』第一卷 第四章参照)。「活用語+ナラバ」は、一方で「活用語+ノナラバ」の形で、準体助詞「ノ」を挿入させる用法と並行する形で使用されるようになるが、こうした形式名詞の用法は、その「ノ」の発達以前において必要な表現形式であったものと考えられる。

なお、渡辺実(一九七二)においては、この「ナラ」の品詞上の位置づけに関して、次のように述べられている。
……「なら(ば)」も甲種第一類の「だ」が、接続関係の表現の愛用形式として、特に用言に下接するに至ったものと位置づけるのが適当かと思われる。その際の統叙の弱化が更に進めば、「なら(ば)」は全く統叙を失って接続展叙の接続助詞に成長し切るのであるが、

静かだなら(ば) 桜だなら(ば)

のような表現が今日なお可能でないことから判断すれば、「なら(ば)」を接続助詞の一つに数える通説には、な